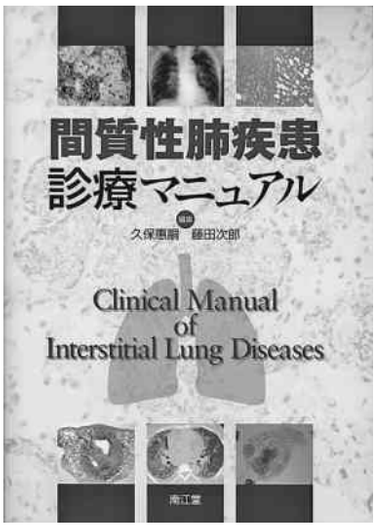
自著と
その周辺

間質性肺疾患診療マニュアル

南江堂　329頁
2010年10月10日　第１刷　発行
2011年５月20日　第２刷　発行
定価　9,000円



呼吸器病学は，扱う疾患分野が幅広く，感染症学，免疫・アレルギー学，腫瘍学の三大分野に加え，呼吸器病学の特有疾患とも言える間質性肺疾患，COPD（慢性閉塞性肺疾患），肺循環障害，職業性肺疾患，睡眠時無呼吸症候群などが含まれます。

間質性肺疾患は，患者数は10万人あたり約10～20人ですが，未診断の早期病変の潜在的患者数はその10倍以上とも推測され，頻度が高く重要な疾患です。しかし，一般医家には認知度が低いのが現状です。間質性肺疾患の代表的な疾患としては，特発性間質性肺炎（IIPs），膠原病肺，ニューモシスチス肺炎，過敏性肺（臓）炎，などですが，稀な疾患まで含めると200以上もあります。さらに最近，生物学的製剤である新規抗リウマチ薬やがん治療薬である分子標的薬などによる薬剤性（間質性）肺炎が増加しており，間質性肺疾患の診断や鑑別がより一層重要になってきています。

間質性肺疾患は，診断が比較的困難で，未だ治療法がなく予後不良の疾患が含まれます。しかし，近年，間質性肺疾患の診断や治療に著しい進歩がみられています。診断面では，胸部 CT，特に高分解能 CT（HRCT）などの画像診断機器の進歩，胸腔鏡手術による外科的肺生検の普及，KL-6などの間質性肺炎の血清学的診断マーカーの保険適応，鑑別診断としての各種の感染症迅速診断の開発・応用，などが挙げられます。治療法では IIPs の代表的新患である特発性肺線維症（IPF）に対するピルフェニドンの開発・上市が画期的です。本薬は本邦の研究者により治験が行われ世界に発信され注目されています。IPF の予後の改善や IIPs での治療の新たな展開が期待されています。

HRCT の進歩は病理組織像との対比を可能にし，呼吸器病学に新たな領域を開発しました。例えば，この対比は IIPs の病態解明に繋がり，従来 IIPs の診断には外科的肺生検による組織学的診断が必須とされていますが，IPF では病理診断がなくとも HRCT 所見から臨床診断ができます。また，関連する様々な領域，例えば膠原病・膠原病類似疾患の肺病変の病型の整理にも役立っています。しかし，画像診断の判読には熟練を要するし，病理組織学診断は内科医にとっては難解な点が多いのが現状です。

前置きが長くなってしまいましたが，以上の現状や問題点を踏まえ，本書は呼吸器疾患の中でも診療が難解と言われている“間質性肺疾患”をテーマとして，その診断と治療を，実践的でマニュアル的な書を目指して，分かりやすく，臨床に即して，かつ，最新の情報の呈示，をモットーに，盟友である琉球大学医学部感染症・呼吸器・消化器内科学 藤田次郎教授と編集しました。

本書は大きく４つの章に分かれます。最初の３つの章は，総論的な内容で，間質性肺疾患の基礎知識，診断・検査および治療法に焦点をあてました。特に，診断・検査では，画像と病理の対比アトラスとして多くの頁を費やしています。執筆者は画像と病理の第一人者にお願いしており，本書の特筆すべき章です。第４章では各論的に個々の疾患をさらに深く学んで頂くことを目的に，IIPs から職業性肺疾患までのほぼすべての間質性肺疾患につき，病態生理，診断，治療などにつき詳細に記載してあります。

本書は，研修医から呼吸器専門医までは勿論，願わくは，呼吸器学に興味のある一般内科医，間質性肺疾患を診察する機会の多い膠原病，関節リウマチの先生方にも一読をお願いしたいと存じます。お陰さまで好評で第２刷を行っています。

（信州大学医学部内科学第１講座　久保　惠嗣）